

# 伊那谷スケッチ

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第四十四回



前島久美

## 獵は、お山と話をするように

よく育ったメスの鹿が四肢を大の字に縛られ、すでに生氣を失った濁った目は空を仰いでいる。腹は縦に割かれて内蔵から湯気が上がっていた。お隣の神田さんは獵師だ。朝早くから下処理に余念がない。「立派な鹿が獲れましたね」思わず車中から声をかける。「かわいそうだけど、仕方がない。畠を荒らすで敵だ。一番美味しいところを持ってくか」そう言って神田さんが内蔵の塊の中から取り出したのは「心臓」だった。実家の旅館でも鹿肉はメインの定番だ。ロースやフィレが柔らかく、現代人の好みに合うのでよく使う。けれど最上級が心臓とは、初耳だった。ジビエの精肉所でも扱っていない部位なだけに頂くのが楽しみだ。

その日は弟の経営するフレンチレストランでサービスの仕事だったのでそのまま持つていって、まかないで焼いてもらった。鹿の心臓は皆食べた事がない、初体験だった。「牛ハツとかわらないですね」店の吉田シェフが驚いていた。

動物でも山菜でも食材を「死にたて」で扱える強みを持つのが獵だ。今年、弟の允（まこと）は狩獵免許を手に入れた。食材が身近に豊富な分、その鮮度にこだわりはじめると行き着くのが「獵師」と言う事になる。

季節の成り行きは命の釀成の一部。年々に違う温度や湿度、風の流れ。これら目に見えないものは山の中で影響し合って、やがて形になって現れる。季節が巡る中で、肌で感じ取った目に見えない情報と山の中の具現化率がイコールになっているとお山と話が出来たようで嬉しい。

## かくありたい

黒の田井水の組合に加入して3年目。今年はお世話人をしている。黒の田井水の組合員は8軒。そのうちお米を栽培している組合員が1年交替で組合長を努めることになっている。私達

も含めて3軒が黒田井水で米作りを行なっているのでこれから2年おきにお世話人の仕事が回ってくることになる。

集落から4キロ離れている山の上から引っ張ってくる井水の状況は天候に左右される。台風や

大雨で水の取り口が埋まつたらスコップやジョレンを持ち出してレスキューするのがお世話人の仕事だ。今年は大きな工事の必要性はなく、なんとか月1、2回の掃除で水量を維持できた。

ところが稻の取り入れも終わって田畠終いの頃、流量が思わしくないので行ってみると2つあるパイプの内1つに問題があった。ジョイントの所から水が吹き出し、下流の出口の所からは水が少量しかでていない。パイプの破損を防ぐため厳冬期も水を流しておくのが決まりとなっているのでなんとかしなければいけない。

その場では判断がつかず、下山して後見人の上前(かんまえ)さんと連絡をとった。上前さんは事あるごとに指示を仰いでいる頼もしい存在だ。状況を説明すると、どういう対処が必要なのか大方見当がついたようだ。翌日一緒にまた山にあがることになった。

上前さんは状況を見た上で作業の段取りを説明して、素人の私達に意見を求めてきた。彼は幼少の頃から黒の田井水で祖父母、両親がどんな作業をして来たかを見て来ているし、更に何十年と整備にあたってきた方だ。だから指示の出し方もトップダウン的なものを想像していた。だけにはつとした。

「こういう風にやろうと思うのだけど、あなたはどう思いますか？」

私は長らくこの言葉掛けをしてもらひたかったのだろう。こここのところ「決まったことだから、こうやります」と言う乱暴な人たちと対峙してきたらどうか、このような丁寧なやり取りで進む作業に精神的な淀みを浄化してもらったようで、清々しかった。自分が正しいと思う気持ちがない、もしくは抑制したやり取りは、美しい。

## 2019年 右馬允(うまのじょう)築100年記念文化イベント

実家の右馬允は、両親が結婚と同時に開業した。今は「オーベルジュ」という言葉がよく使われているようだが、季節の地の食材を楽しめる料理宿だ。私が幼かった30年前は、まだ旅館経営も駆け出でお客様の利用率も低く1階が私達家族の生活スペースだった。広い庭と名前の付く複数の

土蔵、お客様も泊まれる住宅兼、宿。そんな当たり前も、進学してその先々で出会った友人を実家に招く度に、それが特別なものであると言う認識が高まっていったのを覚えている。

今年はその右馬允が築100年の節目だ。夏の終わり頃から飯田市歴史研究所の福村任生(みづき)さんに建物の調査をしてもらっている。

福村さんは調査に来る度に首を傾げて「私の経験不足かもしれません、なんでここはこういう作りになっているか不思議なんです」と呟いた。それもそのはず。設計したのは曾祖父の隆俊様。建築は素人だけれど超器用な人だった。右馬允の建物と同年の祖母によれば「とにかく何でも作った」という。彼の作った印鑑や木彫りの置物等が残っていて、私達は彼の器用さとセンスの良さに今でも触れることができる。持ち前のセンスと東京遊学の経験を基に限られた資材を工夫して、モダンに仕立てたのだろう。そのことを福村さんに伝えると「イメージを立体にする事に長けた人だったのですね」と頷く。福村さんは右馬允の建物について、築100年の建物はざらにあるけれど、持ち主が主体的にイノベーションして利活用している例は少ない。また、伊那谷で二階建ての建物というと2階の部分は、多くは蚕室として設計されているがもともと客室としてデザインされているのは伊那谷界隈において珍しいと評価。福村さんによれば右馬允の建物は「本棟造の平屋部分と近代和風?の二階建て住宅が前後に結合された珍しい形式の建築」とのこと。ご興味があればご参加ください。私の暮らす上蔵集落と実家をご案内します。

## 「大鹿村上蔵まちなみ×旅舎右馬允たてもの見学会」

案内 福村任生(飯田市歴史研究所) 前島久美

●日時 2019年12月22日(日)

●午前の部 10:30~ 上蔵集合 「まちなみ」見学

●午後の部 13:20~ 旅舎 右馬允 「たてもの」見学

\*昼食は各自